



どうしたら戦争はなくなるのか——戦争を忘れないことだ

戦没者の訴えが聞こえる

軍島五 六十七歳 大岩 芳男

戦争の話ですか、今日も遺族の集まりで聞いてきたんですが、戦争が終わって日本に帰る船の中でたくさん泣いたそうです。死体は船から海へ投げ込んだ。今だから言える、その人は言っていました。逆に今も言えない話があるとも言っていました。わかつたしは昭和十七年十二月に召集されました。赤紙がきたときはもうためたなと思いました。北千鳥へ行きそこで終戦を迎えました。その後、シベリアへ抑留され、帰ってきたのは二十三年の九月でした。小学校のときの友達がいっぱい死んでました。三十人同級生がいたんですが十人くらい亡くなり

遺族会の会長の大岩さんにまず話してもらいました。戦争を二度と起こさないことが戦没者の霊に頼むことと言います。

弟の遺骨箱には何もなし

大野八区 七十歳 山際 寅作

昭和十八年の四月、仙台へ弟の遺骨を取りに行きました。戦死したのは十七年の秋だと聞きました。が、発表を遅らせたのです。そのとき仙台には三千人ぐらいの遺族のかがきていました。皆さん無言でした。わたしの骨箱には何も入っていませんでした。

弟に召集令状がきたのは十六年の九月の末。正午ごろでした。やあきたか、今行きたくないな、というのが最初の言葉でした。その年の三月にソ満国境で二年ほどの現役を終え除隊して帰ってきたばかりでした。仙台の工兵部隊に入隊して一月たち、これから出発します。お身体を大切に、と簡単な手紙がありました。ちょうど大

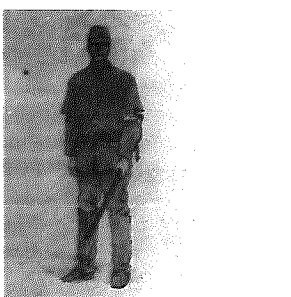


いい戦争——どんな名目であれ、いい戦争などはないと思う。

話のたき

特集・平和

戦争の今



7ページの白川さんの戦死した前さんの絵。戦友と名乗る人が三年前に訪ねてきて、描いたのでもらってほしいと置いて行ったという。

二十で出征、三十一で復員

下山田 七十二歳 平林 太郎

わたしは十年も軍隊にいました。昭和十年十二月一日に、二十で召集され、帰ってきたのは二十一年五月十九日の朝。三十一でした。大きな荷物を背負ってきたので、何かいいものを持ってきたのでは、と思われました。中身は毛布だけでした。十年間に戦死のうわさが三回も流れたそうです。役志願しました。本音を言えば軍隊なんか行きたくなかった。でも、場に勧められるんです。それに若かったし、周りも戦争一色で、戦争が当たり前なんです。行かないなんて言えないわけです。そういう状況になっていました。いまの若い人にはわからないでしょうけど、わたしもときどき、

多くの戦地へ赴き、戦没者記念誌の編集の際は、地名に誤りはないかと校正を八回もした平林さん。弟さんが戦死されています。

戦争の責任——しかたがなかったと言ってすむのかどうか。



二年十カ月のシベリア抑留

善久東 六十九歳 白川正太郎

兄が十八年に戦死し、弟も出征した。オレは十九年二月に召集され千島に行った。そこで戦争が終わりシベリアへ抑留された。トムソンという収容所だ。三、四百人いて、山の木の伐採や鉄道工事をした。労働時間は八時間。熱があると休ませてくれた。さすが社会主義の国だと思った。食物には困った。コーリヤン、大豆、トウキビばかりで、残り物の奪い合いだった。同じ捕虜同士なのに、腕力のある者がいっぱいだった。いやだったわ。栄養失調寸前だった。寒さはそうでもなかった。零下三十度を下がる作業は中止だったし、まきはあった。ソ連はまき

だれが戦争を起こしたのか——だれだろ、だれかいんだろうが。

